宮城県文化財調査報告書第 50 集

清　水　側　遺　跡

昭和 52 年 3 月

宮城県教育委員会
宮 城 県 農 政 部

古川市清滝

清水側遺跡（しみずはた）

序

肥沃な大崎平野の中心部に位置する古川市内には，国史跡の大吉山瓦窯跡や宮沢遺跡をはじめ，140 か所を超える数多くの遺跡があります。本書でとりあげる清水側遺跡も先人の生活や文化を明らかにする上で貴重なこれらの文化遺産の一つであります。

そもそもこの遺跡は，古川市の北部，清滝の清水側地区における大崎広域農道建設工事に伴って，昭和 50 年 12 月に発見されたもので，農道建設の予定ルート上及びその周辺に方形状の塚が分布していることがわかりました。

宮城県教育委員会は，昭和 51 年 11 月に，その中の一基である長方形状塚を発掘しましたが，本書はその調査結果をまとめたものであります。学術資料等に広く御活用いただければ幸いです。

なお，本書を発行するに当たり，この調査に深い御理解と御協力を賜った関係各位に対し，厚く御礼を申し上げます。

昭和 52 年 3 月

宮城県教育委員会

教育長　**津　軽　芳三郎**

例　　言

1. 本書は，大崎広域農道工事に伴う清水側遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡所在地：古川市清滝字清水側(遺跡記号:ＥＧ，宮城県遺跡地名表登載番号:27139)
3. 調査期日：昭和51年11月4日～11月30日
4. 調査主体：宮城県教育委員会
　　宮城県農政部
5. 調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課
6. 調査面積:約200㎡，実発掘面積:185㎡
7. 調査協力機関：古川市教育委員会
8. 地元協力者：今野勝義(地権者)，武川悦二，岩渕藤太，岩渕彰夫，千葉龍雄，今野繁，児玉幸造，長浦信雄，宍戸宏，千葉三男，高橋覚･長浦ときよ･山崎シモ子，武川昭子，千葉たき子，長浦まつ代，児玉ゆり子
9. 本書の執筆・編集は宮城県教育庁文化財保護課が行なった。
10･本書において，土色については「新版標準土色帖」（小山，竹原:1967）を，土性については国際土壌学会法の粒径区分を参照した。
11. 本書第1図は建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の5万分の1地形図を複製したものである（承認番号，昭51東複第512号）。
12. 清水側遺跡は，今回調査を実施した1号塚およびその周辺の塚群を総称している。
13. 本書の作成に際し，東北大学歯学部・葉山杉夫氏，北上市・菊池啓治郎氏，東北歴史資料館・斎藤鋭雄氏，藤沼邦彦氏，尚綱女学院短期大学・佐藤正人氏の教示をいただいた。

目　　次

I　調査にいたる経過 1
II　遺跡の位置と環境 2
　1．位置と自然環境 2
　2．周辺の遺跡と歴史的蓑境 3
Ⅲ　調査の方法と経過 5
IV　調査の成果 6
　1．踏査および測量調査 6
　2．表土･崩壊土を除去した状態 7
　3．封土 7
　4．周溝 7
　5．内部施設 10
　６.塚の構築手順 14
V　考察 15
Ⅵ　まとめ 17

Ⅰ　調査にいたる経過

宮城県農政部は，昭和47年度より大崎北部地区広域営農団地農道整備事業を推進して今日にいたっている。このいわゆる大崎広域農道は宮城県遠田郡田尻町から古川市を経て玉造郡岩出山町にいたるものである。本遺跡は，農道の工事中に古川市清滝字清水側地内で発見された。

昭和50年12月24日，農政部の連絡を受けて関係者立会いのもとに，宮城県教育庁文化財保護課と古川市教育委員会が現地調査を実施した。その結果，長方形状塚1基，方形状塚3基の計4基が確認された。とくに，長方形状塚は長軸約16.5m，短軸約9.5m，高さ約1.2mのもので，広域農道の道路幅員にその一部がかかっていた。

これら4基のうち，長方形状塚について一部壁面を観察したところ，人為的に積土されており，古墳もしくは中世から近世にかけての塚であろうと推定された。そこで遺跡発見の事態をふまえて農政部側と保存に関する法線の検討等を協議したところ，長方形状塚1基を事前調査し他の3基は保存することになった。

そこで，上記の長方形状塚1基について農政部の委託を受け，昭和51年11月4日から11月30日までの間，宮城県教育庁文化財保護課が調査を実施した。

写真Ⅰ　Ⅰ号塚の現状

II　遺跡の位置と環境

1．位置と自然環境

清水側遺跡は古川市清滝字清水側に位置する。古川市の最北部にあって，陸羽東線陸前古川駅の北東約12㎞の地点である。

宮城県北部には栗駒山と荒雄岳から南東に延びる標高約100mの築館丘陵が発達している。この築館丘陵は岩出山町の北東部で大きく2つに枝分れする。北側の丘陵は伊豆沼，長沼へ向って延びる。南側の丘陵は，古川市北部を東に延び箆岳丘陵へと続く。これらは，さらに樹枝状に張り出し小丘陵を形成している。また，これらの丘陵の南側には，大崎低地と呼ばれる扇状地性低地(沖積地)が広がっている。

清水側遺跡は，南側へ分枝する築館丘陵からさらに北東に向って張り出した標高約70mの小丘陵上に立地している。

写真２　清水側遺跡の塚（２・３号塚）

2．周辺の遺跡と歴史的環境

清水側遺跡周辺には，数多くの遺跡がある。旧石器時代の遺跡としては，本遺跡の南西約5.5㎞の丘陵上に，昭和51年I1月に発掘調査された岩出山町座散乱木の遺跡がある。この付近からは，最近多くの旧石器時代の遺跡が発見されている。

持猟，漁撈，採集などの生産活動がさらに発展した縄文時代になると，笹森遺跡，上前田遺跡などがある。

また，水稲栽培に生産の基礎をおく弥生時代の遺跡としては，下蝦沢遺跡，野崎遺跡などがある。

古墳時代になると，宮城県北部にも階級的な分化のきざしがみられるようになる。本遺跡の東側約5㎞で発見された高清水町東館遺跡の方形周溝墓はそのことを示していると思われる。古墳時代中期になると，青塚古墳のような全長約107mの前方後円墳(？)が出現してくる。古墳時代後期になると，支配者層も分化して古墳を築造する階層が広がったものと考えられ，それが群集墳，横穴古墳群としてあらわれるようになる。日光山古墳群，塚原古墳群，北山囲古墳群，畑谷地古墳群，小野横穴古墳群などがそれである。それに対して，一般民衆の集落跡としては留沼遺跡，東館遺跡などがある。

奈良・平安時代に入ると，古川市周辺も律令国家の中に組み込まれるようになってくる。本遺跡の南約5㎞には，多賀城創建期の瓦を焼いた史跡大吉山瓦窯跡，城柵または官衙跡と考えられる史跡宮沢遺跡がある。また，一般民衆の集落としては藤屋敷遺跡，高清水町西手取遺跡などが知られている。

中世･近世になると，本遺跡周辺には，多くの館跡が存在する。清水側館跡(今調査時に発見)，明神館跡，岩出山町宿の沢館跡などがある。また､塚としては､高清水町宮ノ脇遺跡，岩出山町座散乱木遺跡などがある。集落跡としては，最近調査された高清水町観音沢遺跡がある。

第1図　清水側遺跡と周辺の遺跡

Ⅲ　調査の方法と経過

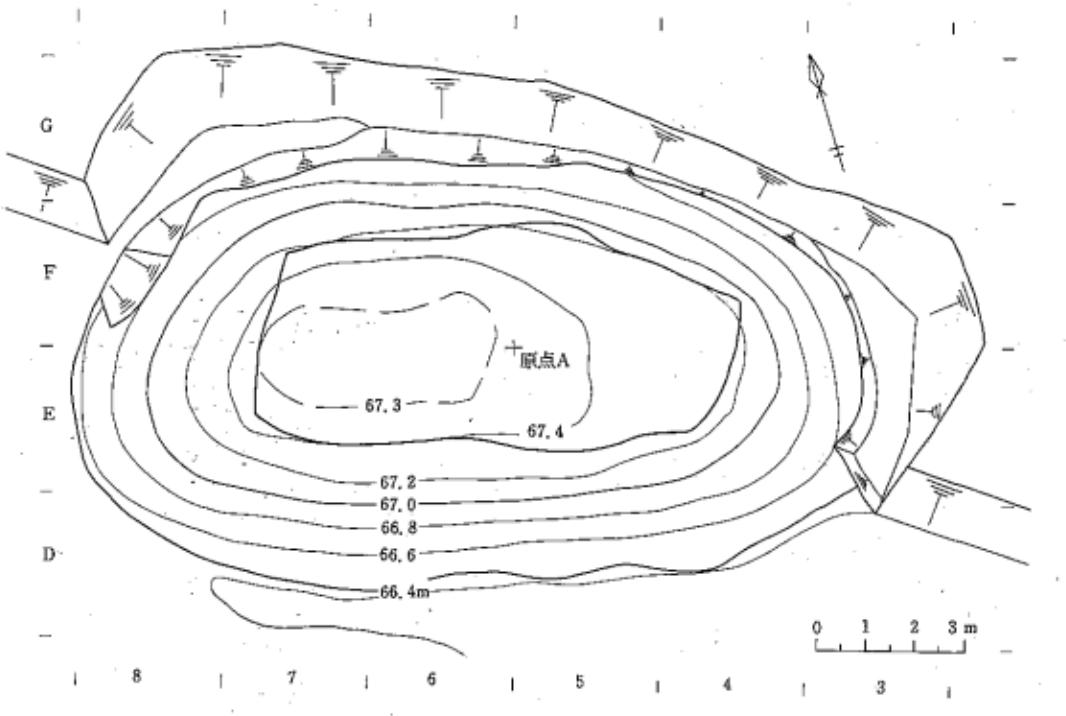
はじめに, 今回調査の対象となった1号塚およびその周辺の塚を含めた1/500の地形図を作成した。さらに，1号塚の1/50の平面図を作成した。

発掘調査をはじめるにあたって, 塚の中心と考えられるところに中心杭(原点Ａ)を打った。1号塚は長方形と推定されることから, 東･西両辺のほぼ中心と原点Ａを結ぶ線を基準とし, それに直交する線を設け3m単位のグリッドを組んだ。原点Ａを基準として, その東側を5区, 西側を6区・北側をＦ区・南側をＥ区とし，それを延長してそれぞれグリッド名を付した。

今回の調査は1号塚を全面発掘することとし，次のような方法で実施した。原点Ａを通る十字の基準線に沿ってあぜを残し，四分法による発掘を実施した。十字のあぜは，塚構築にあたってどのように土が積まれているのかを観察するためのものである。

発掘調査は表土を除去することから始まった。その結果，封土で盛土の上面，封土の外側で周溝の存在が確認された。つぎに，周溝内に埋った土を排除した。この時点で，1/50の平面図を作成した。

つぎに，盛土を層序にしたがって排除していった。その結果，盛土の上部で火葬骨の入ったピットが検出された。また，盛土中から掘り込まれた土壙が検出された。さらに盛土を除去し



第２図　１号塚発掘前の状況

た旧表土面で土壙3基，ピット4個が検出された。

これらの土壙､ピットについては1/50の平面図にその位置を記入した。さらに，火葬骨の入ったピットは1/10の平面図･断面図, 他の遺構については1/20の平面図･断面図を作成した。

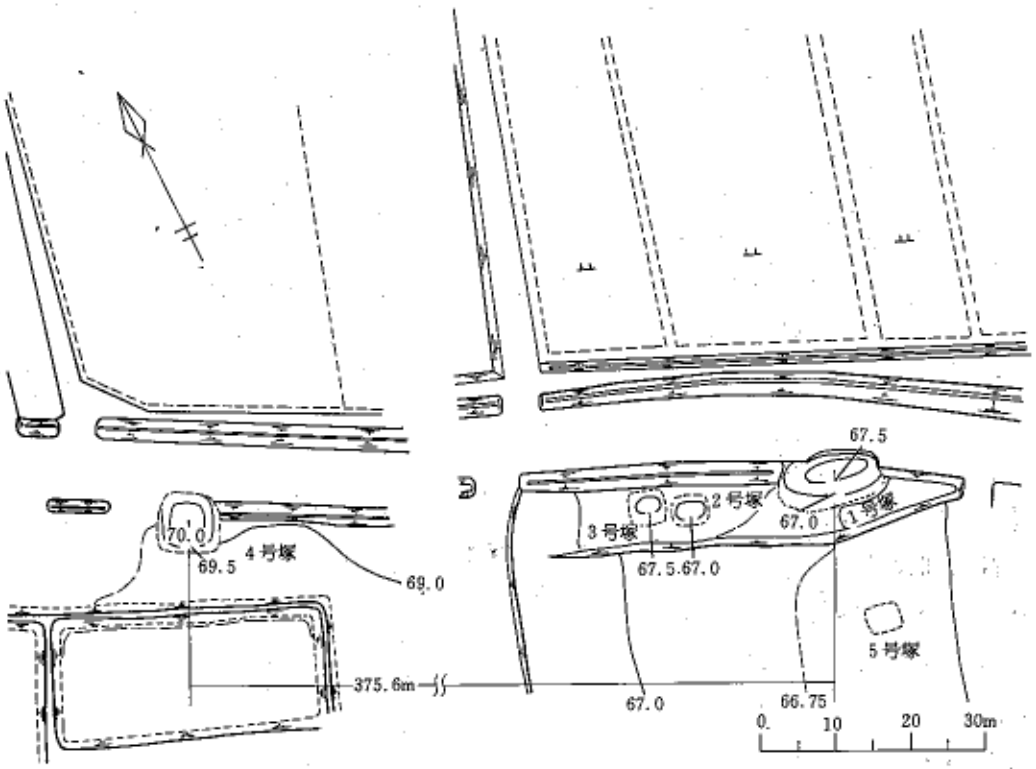
IV　調査の成果

1．踏査および測量調査

発掘調査に先だち1/500の実測図作成のため付近を踏査した。広域農道のすぐ南側，種鶏場の約30m東側に3基の塚が発見された｡また, そこから約375m西側に1基の塚が発見された。そこで，これらの塚を東側から1号塚～4号塚と名付けた。さらに，発掘調査期間中に付近を踏査した結果，1号塚の南側約15mのところに1基の塚を発見し，それを5号塚と名付けた。

1号塚は，塚の麓で長軸約16.5m，短軸約9.5mの楕円形をしていたが，塚の頂部はほぼ平坦で長方形をしている。塚の頂部から麓に向って，わずかに稜線が認められることから，1号塚は長万形の塚であると推定された。また，現地表から頂部までの高さは約1.2mである。

2・3・5号塚は一辺約5m，高さ約0･8mのほぼ方形の塚である。また，4号塚は一辺約8m，高さ約1.2mのほぼ方形の塚である。



第３図　１号塚およびその周辺の塚

2．表土･崩壊土を除去した状態

表土および溝の堆積土を除去した状態は，塚の構築時に最も近い形態を示しているものと考えられるので，以下それについて記載する。

塚の北側は，広域農道の工事の際に一部破壊されているが，塚の規模および平面形は頂部で長軸約11m，短軸約4.8mの長方形である。周溝内側下端で計測すると，長軸約12･2m，短軸約7.4mの四隅が丸味をもつ長方形である。また，周溝外側上端で計測すると，長軸約14.2m，短軸約9m(推定)の四隅が丸味をもつ長方形である。封土の高さは，周溝外側上端(1日表土上面)から約1.1m，溝の底面から約1.3mである。

頂部中央には，10数個の平担な割石が盛土上にのっている。封土は，東・西辺では溝の底面から傾斜をもって立ち上がるのに対し，南・北辺では一度傾斜が変わって頂部に立ち上がっている。

溝は，底面幅約50～90cm，外側上端（急表土上面）から底面までの深さが約20～30cm，断面が「U」字形の溝である。溝は北側の破壊された部分を除き封土にそってめぐっている。

なお，塚の封土および溝は，旧表土と地山を削り出して構築されている。

3．封土

旧表土および地山を削り出して塚の基底部とし，その上に土を盛っている。

盛土は大きく5層に分けられる。Ⅰ層は東側の一部を除く塚の側面に盛られた土である。明褐色土の粒子あるいはブロックを含む層と含まない層とがある。II層は極暗褐色土層である。厚さ約15～30cmで，塚全体にほぼ水平に盛られている。Ⅲ層は明褐色土の粒子を含む黒褐色土層である。塚の南側の一部を除き，厚さ約15～25cmでほぼ水平に盛られている。Ⅳ層は明褐色土の粒子を含む極暗褐色土層である。厚さ約10～30cmでほぼ水平に盛られている。Ⅴ層は黒色土層である。塚全体に厚さ約20～30cmでほぼ水平に盛られている。

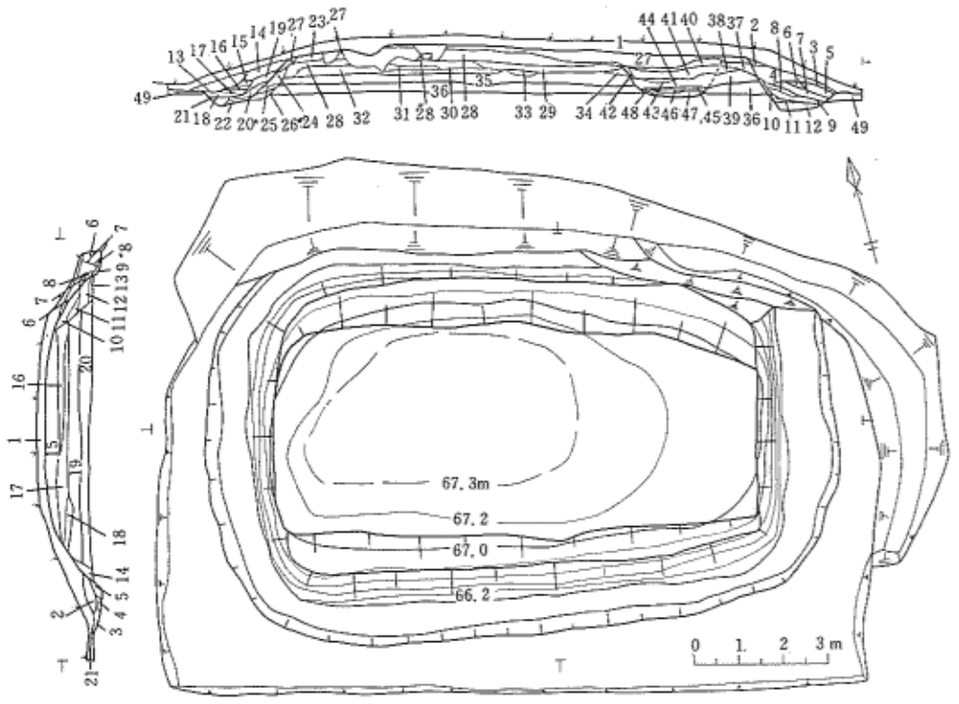
なお，旧表土は極暗褐色土であり，厚さは約20cmである。

4．周溝

表土を除去した後，旧表土上面で溝の外郭線が確認された。溝は塚の北側で広域農道工事による破壊を受けているが，東・南・西側の溝のあり方からみてほぼ全周するものと思われる。

溝は，旧表土上面で幅約125～150cm，底面幅約50～90cm，旧表土上面からの深さ約20～30cmであり，断面が「U」字形である。

溝の堆積土には，明褐色土を含む層と含まない層とがある。それらは，おおむね交互に堆積している。堆積土は溝の内側と外側の両側から流れ込んでいるが，内側からの流れ込みが多い。内側から流れ込んだものの大部分は，塚に積まれた盛土の崩壊土と思われる。



第４図　表土・崩壊土を除去した状態

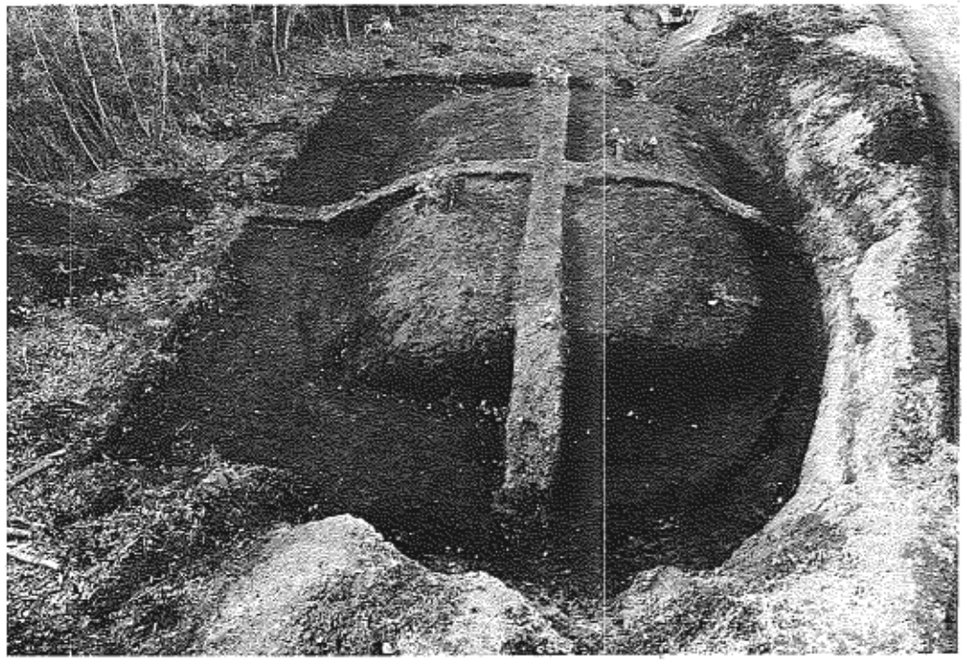


写真３　表土崩壊土を除去した状態

〈南北断面図〉

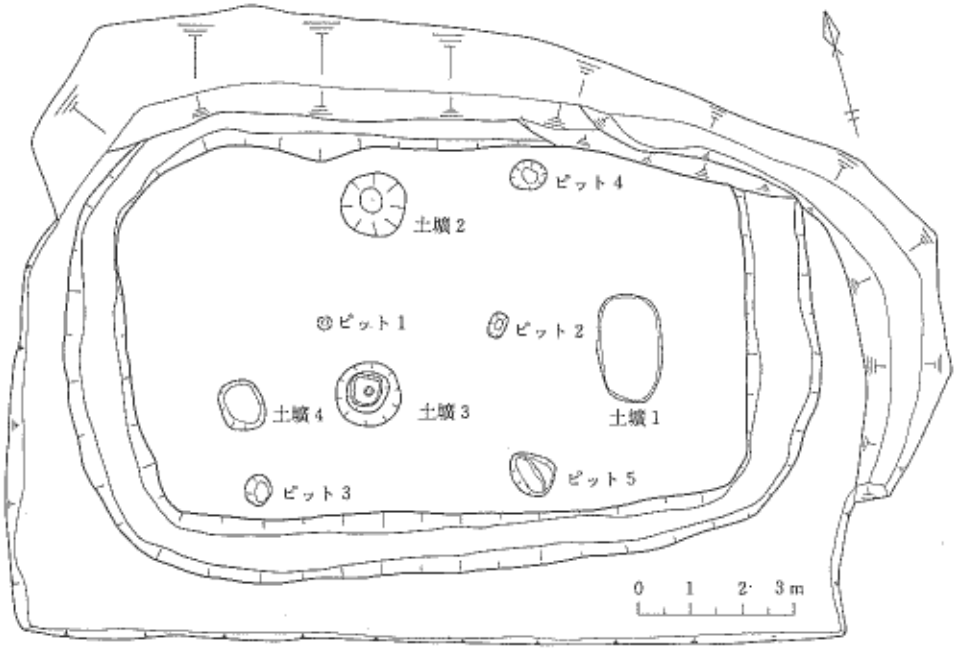
層の名称	層No	土色	土性	混入物、その他
表土	1	暗褐色 (7.5YR 3／3)	シルト	
溝の堆積土	2	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	
〃	3	暗褐色 (7.5YR 3／4)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	4	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	5	暗褐色 (7.5YR 3／3)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	6	暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	7	黒褐色 (7.5YR 2／2)	シルト	
〃	8	黒色 (7.5YR 2／1)	シルト	
〃	9	黒褐色 (7.5YR 3／2)	シルト	明褐色土の粒子まじる
盛土Ⅰ層	10	黒褐色 (7.5YR 2／2)	シルト	明褐色土のブロック含
〃	11	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	
〃	12	黒褐色 (7.5YR 3／1)	シルト	
〃	13	黒褐色 (7.5YR 2／2)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	14	黒褐色 (7.5YR 2／2)	シルト	明褐色土の粒子まじる
盛土Ⅱ層	15	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	明褐色土の粒子まじる
盛土Ⅲ層	16	黒褐色 (7.5YR 2／2)	シルト	明褐色土の粒子まじる
盛土Ⅳ層	17	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	
〃	18	黒褐色 (7.5YR 2／2)	シルト	
盛土Ⅴ層	19	黒色 (7.5YR 2／1)	シルト	
旧表土	20	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	
〃	21	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	

〈東西断面図〉

層の名称	層No	土色	土性	混入物、その他
表土	1	暗褐色 (7.5YR 3／3)	シルト	
溝の堆積土	2	暗褐色 (7.5YR 3／4)	シルト	
〃	3	褐色 (7.5YR 4／3)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	4	褐色 (7.5YR 4／3)	シルト	明褐色土ブロックを含む
〃	5	暗褐色 (7.5YR 3／3)	シルト	
〃	6	暗褐色 (7.5YR 3／3)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	7	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	
〃	8	暗褐色 (7.5YR 3／3)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	9	黒褐色 (7.5YR 2／2)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	10	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	
〃	11	黒色 (7.5YR 2／1)	シルト	
〃	12	黒褐色 (7.5YR 3／2)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	13	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	14	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	
〃	15	暗褐色 (7.5YR 3／4)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	16	黒褐色 (7.5YR 3／2)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	17	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	
〃	18	黒色 (7.5YR 2／1)	シルト	
〃	19	黒褐色 (7.5YR 2／2)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	20	暗褐色 (7.5YR 3／4)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	21	黒褐色 (7.5YR 3／2)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	22	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	明褐色土の粒子まじる
盛土Ⅰ層	23	暗褐色 (7.5YR 3／4)	シルト	
〃	24	暗褐色 (7.5YR 3／3)	シルト	明褐色土ブロックを含む
〃	25	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	26	黒色 (7.5YR 2／1)	シルト	
盛土Ⅱ層	27	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	
盛土Ⅲ層	28	黒褐色 (7.5YR 2／2)	シルト	明褐色土の粒子まじる
盛土Ⅳ層	29	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	30	黒褐色 (7.5YR 2／2)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	31	黒色 (7.5YR 2／1)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	32	黒褐色 (7.5YR 2／2)	シルト	明褐色土の粒子まじる
盛土Ⅴ層	33	黒褐色 (7.5YR 2／2)	シルト	
〃	34	黒色 (7.5YR 1.7/1)	シルト	
〃	35	黒色 (7.5YR 2／1)	シルト	
旧表土	36	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	
盛土Ⅲ層	37	褐色 (7.5YR 4／3)	シルト	明褐色土ブロックを含む
〃	38	黒褐色 (7.5YR 2／2)	シルト	明褐色土の粒子まじる
盛土Ⅴ層	39	黒色 (7.5YR 2／1)	シルト	
土壌堆積土	40	褐色 (7.5YR 4／3)	シルト	明褐色土ブロックを含む
〃	41	黒褐色 (7.5YR 2／2)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	42	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	明褐色土の粒子まじる
〃	43	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	
〃	44	黒褐色 (7.5YR 3／1)	シルト	
〃	45	黒色 (7.5YR 2／1)	シルト	
〃	46	黒褐色 (7.5YR 2／2)	シルト	
〃	47	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	
〃	48	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	明褐色土の粒子まじる
旧表土	49	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	

5. 内部施設

検出された内部施設としては，土壙４基，ビット５個がある。以下，それらについて述べることにする。



第５図　内部施設配置図

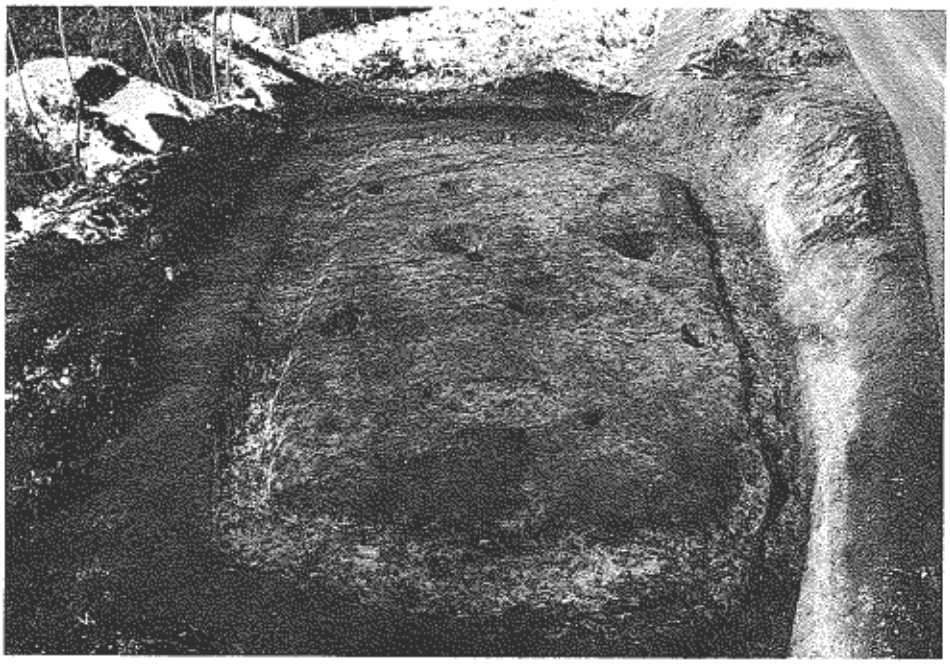


写真４　内部施設の状況

A．土　壙

土壙には，盛土中で確認されたものと，旧表土上面で確認されたものとがある。発見順に第1～第4土壙とした。

＜第1土壙＞

塚の東部で検出された土壙である。盛土Ⅲ層上面で，落ち込みらしい遺構の一部を確認した。西側ではその輪郭が確認されたが，東側では掘り込んだ層と遺構の堆積土との区別ができなかった。したがって，遺構全体の輪郭を確認しえたのは，旧表土上面であった。それによると，平面形は長軸約200㎝，短軸約120㎝のやや丸味をもった長方形である。遺構全体の確認面(旧表土上面)からの深さは約20㎝である。しかし，西側輪郭の確認面(Ⅲ層上面)からの深さは約80㎝であることから，本来の土壙の深さは約80㎝であろうと推定される。土壙内堆積土は，旧表土上面の確認面からは3層認められる。また，Ⅲ層上面からは大別すると6層になるものと考えられる(第4図)。ほとんどの層は水平に堆積しており，これらは人為的な堆積土と考えられる。

＜第2土壙＞

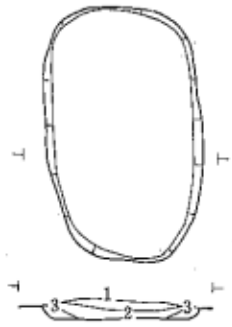
塚の北部に位置し，旧表土上面で黒色土の落ち込みとして確認された。径約120㎝，深さ約80㎝の円形の土壙である。底面径は約30㎝である。堆積土には次の種類がある。1．褐色土, 2. 黒(褐)色土または暗褐色土, 3. 黒(褐)色土または暗褐色土(明褐色土の粒子を含む)。堆積土の堆積状況や，堆積土の中には地山と類似した層があることなどから，土壙内の堆積土は人為的に埋められたものと考えられる。

＜第3土壙＞

塚の中央部よりやや南側に位置し，旧表土上面で黒色土の落ち込みとして確認された。確認された時は径約I25㎝の円形であったが，約40㎝掘り下げたところ平面形は一辺約60㎝の方形に変化した。確認面から底面までの深さは約120㎝である。底面のほぼ中央には，径約20㎝，深さ約10㎝のピットがある。堆積土には次の種類がある。1．明褐色土，2．黒(褐)色土または暗褐色土，3．黒(褐)色土または暗褐色土(明褐色土のブロックや粒子を含む)。土壙底面に近い層は水平に堆積しており，堆積土の中には地山に類似した層があることなどから，土壙内の堆積土は人為的に埋められたものと考えられる。

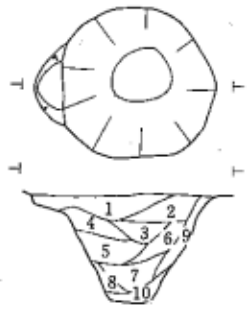
＜第4土壙＞

塚の南西部に位置し，旧表土上面で黒色土の落ち込みとして確認された。平面形は，長軸約100㎝，短軸約80㎝のやや丸味をおびた長方形である。確認面から底面までの深さは約40㎝である。堆積土は5層認められたが，自然堆積土であるのか人為的な堆積土であるのかの判別はできなかった。



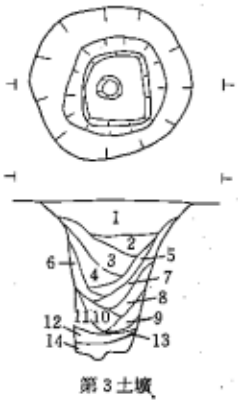
第１土壙

層No.	土色	土性	その他
1	黒褐色 (7.5YR 2／2)	シルト	
2	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	
3	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	明褐色土の粒子まじる



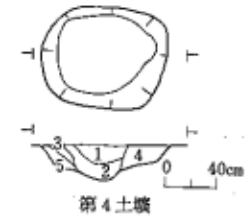
第２土壙

層No.	土色	土性	その他
1	黒褐色 (7.5YR 3／2)	シルト	
2	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	明褐色土の粒子まじる
3	黒褐色 (7.5YR 3／2)	シルト	
4	黒褐色 (7.5YR 3／2)	シルト	明褐色土の粒子まじる
5	黒色 (7.5YR 2／1)	シルト	
6	黒色 (7.5YR 2／1)	シルト	明褐色土の粒子まじる
7	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	
8	暗褐色 (7.5YR 3／4)	シルト	
9	褐色 (7.5YR 4／3)	シルト	
10	にぶい褐色 (7.5YR 5／3)	シルト	



第３土壙

層No.	土色	土性	その他
1	黒褐色 (7.5YR 3／1)	シルト	
2	黒色 (7.5YR 2／1)	シルト	明褐色土の粒子まじる
3	黒褐色 (7.5YR 3／2)	シルト	明褐色土のブロック含む
4	黒色 (7.5YR 2／1)	シルト	明褐色土の粒子まじる
5	黒褐色 (7.5YR 3／1)	シルト	
6	明褐色 (7.5YR 3／1)	シルト	
7	暗褐色 (7.5YR 3／3)	シルト	明褐色土の粒子まじる
8	にぶい褐色 (7.5YR 5／3)	シルト	
9	暗褐色 (7.5YR 3／3)	シルト	
10	黒褐色 (7.5YR 2／2)	シルト	
11	明褐色 (7.5YR 5／8)	シルト	
12	暗褐色 (7.5YR 3／3)	シルト	
13	黒褐色 (7.5YR 3／2)	シルト	
14	暗褐色 (7.5YR 3／4)	シルト	



第４土壙

層No.	土色	土性	その他
1	極暗褐色 (7.5YR 2／3)	シルト	
2	黒褐色 (7.5YR 3／2)	シルト	
3	暗褐色 (7.5YR 3／3)	シルト	
4	暗褐色 (7.5YR 3／3)	シルト	明褐色土の粒子まじる
5	にぶい褐色 (7.5YR 5／3)	シルト	

第６図　土壙実測図

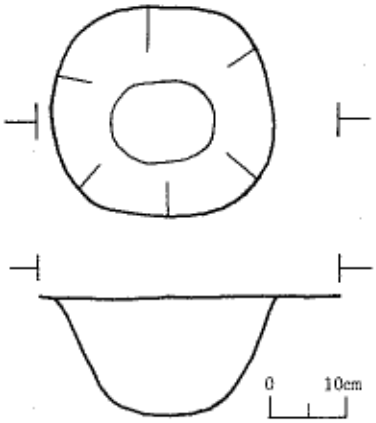
B．ピット

盛土中で確認されたピット1個と，旧表土上面で確認されたピット4個がある。ピットは発見順に1～5まで番号を付した。

＜**ピット1**＞

塚の中央部よりやや西側に位置し，盛土Ⅲ層を掘り込んでいるピットである。ピットの上は木根による撹乱を受けており，ピットの掘り込まれた面は不明である。ピットは径約30cm，深さ約15cmである。ピット内には，暗褐色土とともに火葬骨片[(注)1]がほぼピット全体に入っていた。

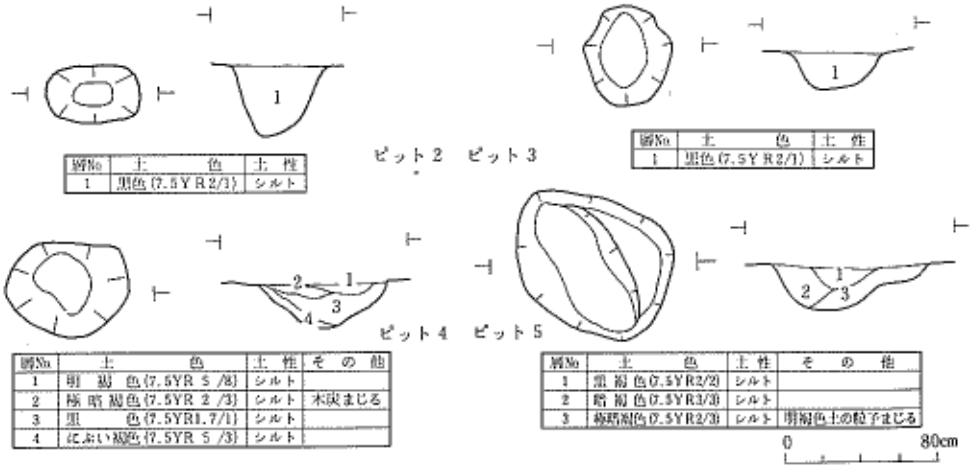
写真５　火葬骨の出土状況



第７図　ピット１実測図

＜**その他のピット**＞

ピット2～5はいずれも旧表土上面で確認された。ピットの平面形はピット2のように丸味をおびた長方形のものもあるが，ピット3・4・5は任意の平面形である。大きさが約50～80cm，深さ約20～40cmのものである。堆積土などからみて，木根の可能性がある。



層No	土　　色	土　性
1	黒色(7.5YR2/1)	シルト

ピット２　ピット３

層No	土　　色	土　性	その他
1	明　褐　色(7.5YR 5 /8)	シルト	
2	極 暗 褐色(7.5YR 2 /3)	シルト	木炭まじる
3	黒　　色(7.5YR1.7/1)	シルト	
4	赤みい褐色(7.5YR 5 /3)	シルト	

ピット４　ピット５

層No	土　　色	土　性	その他
1	黒 褐 色(7.5YR2/2)	シルト	
2	暗 褐 色(7.5YR3/3)	シルト	
3	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	明褐色土の粒子まじる

第８図　ピット実測図

６.塚の構築手順

ここでは，塚を構築するにあたっての，その手順について記述する。

周溝の内･外側の旧表土および地山が削り出され，溝となっている。また，周溝内側の旧表土は，東側の一部を除いて溝の立ち上がりより約30～50㎝内側へさらに削られている。その間には盛土I層が積まれており，それが周溝内側の壁になつている。さらに，周溝内側の旧表土の上には盛土Ⅴ～Ⅱ層が積まれている。盛土Ⅰ層は，盛土Ⅱ～Ⅴ層にかぶっている。

これらのことから，塚の構築手順としては「①旧表土と地山を削り出して周溝を掘る。②旧表土を周溝内側の立ち上がりより約30～50㎝内側へ削り出す。③盛土Ⅴ～Ⅱ層を積み重ねる。④削り出された旧表土と溝の間に，盛土Ⅱ～Ⅴ層にかぶせながら盛土Ⅰ層を積む。」ということになる。

さらに，この構築手順に内部施設を加えてみると次のようになる。第2～第4土壙は旧表土上面で確認されている。このことから，これらの土壙は塚構築以前にその位置に掘り込まれた可能性もある。しかし，周溝の外側からは土壙が検出されていないことなどから，塚にともう可能性の方が大きいものと思われる。もし，塚にともなうものとすれば，塚の構築手順で述べた②と③の間にくるものであろう。

第1土壙は盛土Ⅲ層から掘り込まれていることから，③の構築手順の盛土Ⅲ層までを積んだ後に掘り込まれたことになる。

ピット1は上の層が木根による攪乱層であることから，掘り込み面は不明である。しかし，盛土Ⅲ層を掘り込んでいるところから，盛土Ⅲ層を積んだ後に掘り込まれたものである。

Ⅴ　考察

調査成果にもとづいて，1号塚の性格および年代について考えてみたい。1号塚は，長軸約14.2m，短軸約9mの長方形であり，発見された内部施設には，土壙･ピットがある。ピット1からは火葬骨片も出土している。また，封土や内部施設からの出土遺物はない。さらには，1号塚の周辺からは一辺約4mの方形の塚が3基，一辺約8mの方形の塚が1基発見されている。1号塚の形態･内部施設のあり方などから，1号塚を古墳と考える根拠は薄い。古墳でないとすれば，周囲の塚のあり方などから，墳墓･十三塚などが考えられよう。

最近になって，このような遺跡の発掘調査が実施されてきたが，宮城県内の主な遺跡をあげると次のようなものがある。

白石市	権現山遺跡	（県教委：1973）
角田市	横倉大久保遺跡	（県教委：1977）
宮城町	想海塚遺跡	（町教委：1973）
大和町	日光山遺跡	（県教委：1973）
岩出山町	座散乱木遺跡(注)2	
高清水町	宮ノ脇遺跡	（県教委：1975）

権現山遺跡では内部施設，出土遺物ともに発見されなかったが，塚群の配置などから十三塚に類似するものと考えられている。横倉大久保遺跡では，塚のほぼ中央部から旧表土を掘り込んだ長軸約60cm，短軸約30cmの楕円形の土壙が検出され，その中から焼米，古銭（皇宋通宝・至和元宝など）や火葬骨片が出土している。想海塚遺跡では内部施設は認められなかったが，壇の肩部にあたる部分に河原石を並べており，封土からは古銭(紹聖元宝・元豊通宝・祥符通宝・皇宋通宝など)が出土している。このことなどから，想海塚遺跡は経塚あるいは宗教的築壇とみられているようである。

日光山遺跡からは，重層方壇.周溝と葺石をもつ塚，墳墓などが発見されている。重層方壇では土壙から北宋銭が出土している。墳墓には火葬墓と土葬墓があるが，寛永通宝などの出土によりそれらは江戸時代のものと考えられている。座散乱木遺跡からは内部施設は検出されなかったが，封土から表杉ノ入式の土師器片が出土している。宮ノ脇遺跡では，内部施設として土壙･ピットなどが検出されており，出土遺物などから中世末～近世初頭の墓であろうと考えられている。

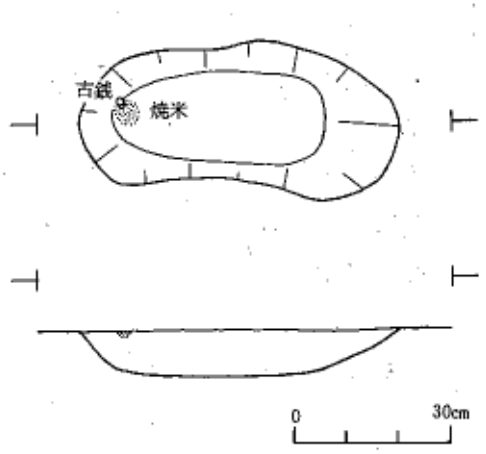
つぎに，これらの遺跡と本遺跡1号塚を比較してみることにしたい。内部施設として，土壙やピットが検出されている遺跡は，横倉大久保遺跡，日光山遺跡，宮ノ脇遺跡がある。日光山遺跡の重層方壇を除く墳墓と横倉大久保遺跡や宮ノ脇遺跡の塚からは，いずれも人骨･古銭な

どが出土しており，これらのことから，各遺跡の塚は墳墓であろうと考えられている。本遺跡の土壙は円形，上部が円形で下部が方形，やや丸味をもつた長方形のものがある。円形や方形のものは規模等が日光山遺跡のものと類似し，長方形のものは宮ノ脇遺跡からも発見されている。以上のことから，本遺跡は墳墓である可能性が強い。

また，火葬骨の発見された遺跡としては横倉大久保遺跡，日光山遺跡がある。横倉大久保遺跡では，旧表土を掘り込んだ土壙の中から，日光山遺跡では旧表土と地山を掘り込んだピットから検出されている。いずれも古銭などが伴出していることなどから，火葬墓と考えられている。このようなものに，北上市宝積古墓群(菊池：1970)がある。同遺跡1〜3号墳では，墳頂部に不規則な葺石があり，その下の封土中から火葬骨片がまとまって出土している。とくに2号墳ではそれとともに刀子，古銭(熙寧元宝･元祐通宝)などが出土している。また，北上市柏木由段の森遺跡[注3]では，東西約8.6m，南北約14m，高さ約1mの長方形の壇がある。その頂部には河原石，山石があり，その下からピットなどの遺構に伴うものではないが，火葬骨片が出土している。両者はともに墳墓と考えられている。

本遺跡の場合は，段の森遺跡と同様な長軸約14.2m，短軸約9m，高さ約1.1mの長方形の塚であり，封土上面に葺石がある点で類似している。また，掘り込み面は不明であるが，盛土Ⅲ層を掘り込んだピットから火葬骨が出土している。段の森遺跡ではピットに伴うものではないが，封土の上部で火葬骨が出土している点でも類似している。以上のことからも，1号塚は墳墓である可能性が強い。

つぎに，1号塚の年代であるが，出土遺物もなく不明である。ただ，横倉大久保遺跡，日光山遺跡，宮ノ脇遺跡，宝積遺跡などから中国銭などが出土し，それらから各遺跡は中世以降〜近世のものと考えられている。このようなことから推せば，1号塚も上記のような年代が考えられるかもしれない。



第９図　横倉大久保遺跡の内部施設

Ⅵ まとめ

今回の調査で得られた成果を要約すると次のようになる。

1．本遺跡は大小の塚群からなる。現在1号塚を含めて5基発見されている。

2．形および規模は長方形である1号塚を除けば，すべて方形のものであり，一辺約5～8m，高さ約1mのものが多い。

3．今回発掘調査を実施した1号塚は，長軸約14.2m，短軸約9m，高さ約1.1mの長方形の塚である。塚には，旧表土と地山を掘り込んでつくられた周溝がめぐっている。盛土は5層認められた。また，封土上面には葺石と思われる割石が10数個出土した。

4．内部施設としては，土壙4基，ピット4個検出された。土壙，ピットの大部分は旧表土上面で検出されたが，土壙1基(第1土壙)とピット1個(ピット1)は盛土中で検出された。なお，ピット1には火葬骨片が入っていた。

5．以上のことから，1号塚は墳墓である可能性が強い。また，その年代については不明である。

6．現在発見されている5基の塚の南側は雑木林になっているが，そこにもこのような塚の存が予想される。

注1．東北大学歯学部葉山杉夫助教授の鑑定によれば，火葬骨片は人骨であるが，細片であるため，性別，年齢等は不明とのことである。

注2．岩出山町史では座散乱木古墳群とされているが，昭和45年にその中の1基を調査した結果，古墳ではないことが判明した。

注3．北上市職員菊池啓治郎氏の教示による。

＜引用・参考文献＞

宮城県教育委員会：「権現山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第31集　(1973)
宮城県教育委員会：「日光山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第31集　(1973)
宮城県教育委員会：「宮ノ脇遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第40集　(1975)
宮城町教育委員会：「宮城町想海塚発発掘報告」『宮城町文化財調査報告書』第1集　(1973)
宮城県教育委員会：「横倉大久保遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第48集　(1977)
桜井晴彦・菊池啓治郎：「鬼柳町古墓群調査報告」『北上市史』第2巻　(1970)
菊池啓次郎：「口内町宝積古墓群の調査」『北上市史』弟2巻　(1970)
板橋源・佐々木博康：「岩手県北上市立花十三菩提塚」『北上市史』第2巻　(1970)
佐佐木忠雄：「古代史」『古川市史』上巻　(1968)
板垣剛夫：「古代」『宮城町史』　(1973)
興野義一・遠藤智一：「宮城県玉造郡岩出山町の考古学遺跡」『岩出山町史』下巻　(1970)
川崎利夫：「山形県における古代・中世の火葬墓について」『東北考古学の諸問題』　(1976)
市立函館博物館：「函館志海苔古銭」　(1973)

写真 6
発掘前の状況

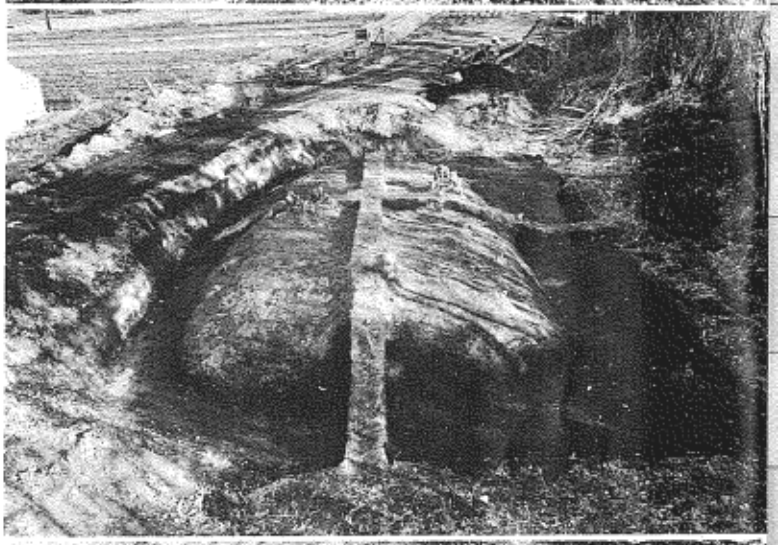


写真 7
表土・崩壊土を
除去した状態

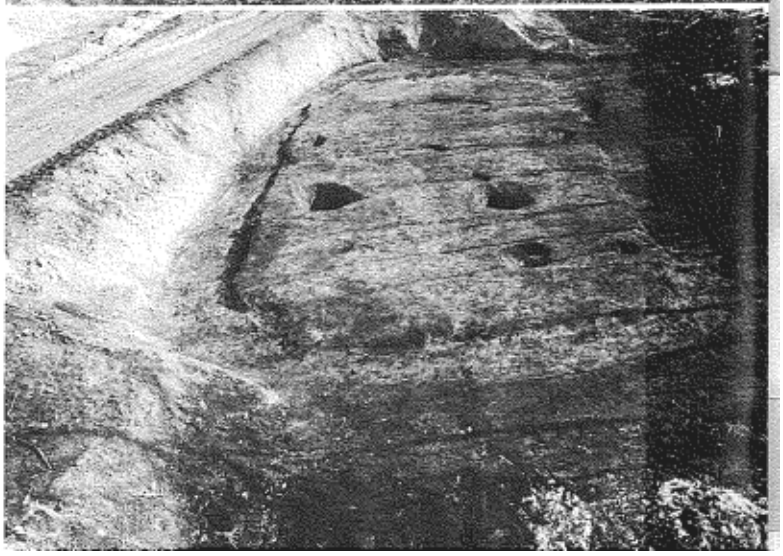


写真 8
内部施設の状況

写真 9
封土の南北断面

写真10
封土の東西断面
（西半分）

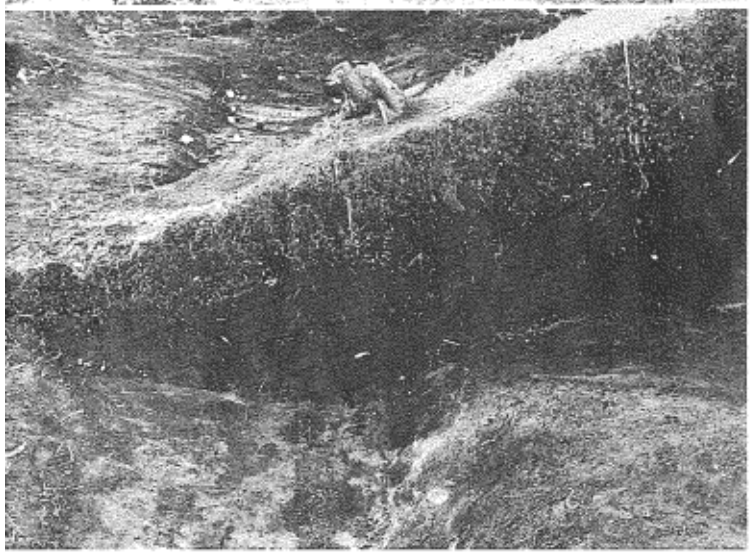


写真11
周溝の状況（南側）

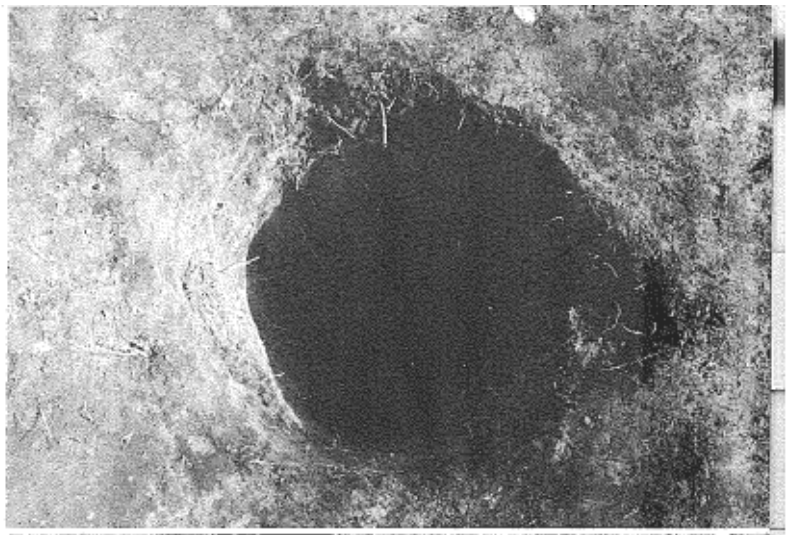


写真12
第2土壙

写真13
第3土壙

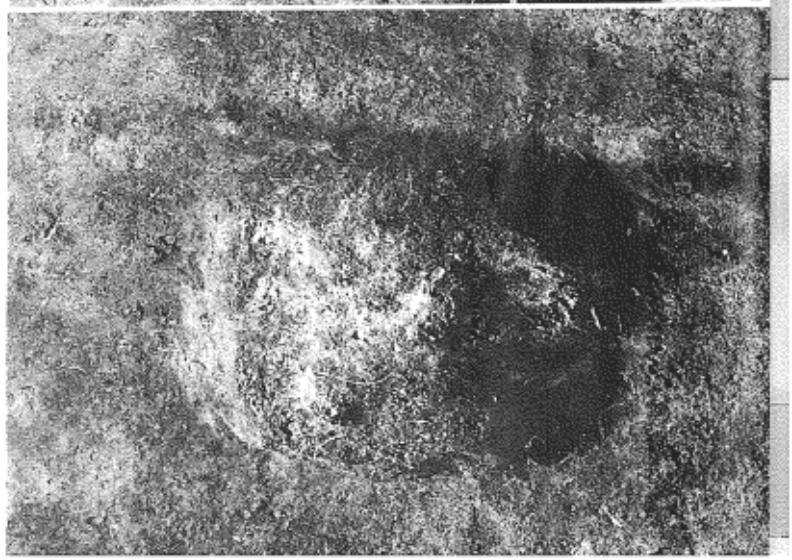


写真14
第4土壙

写真15
ピット1付近の断面

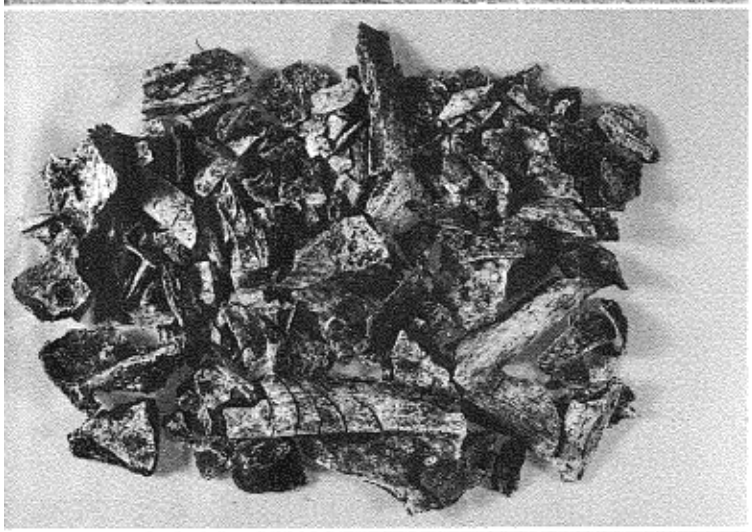


写真16
火　葬　骨

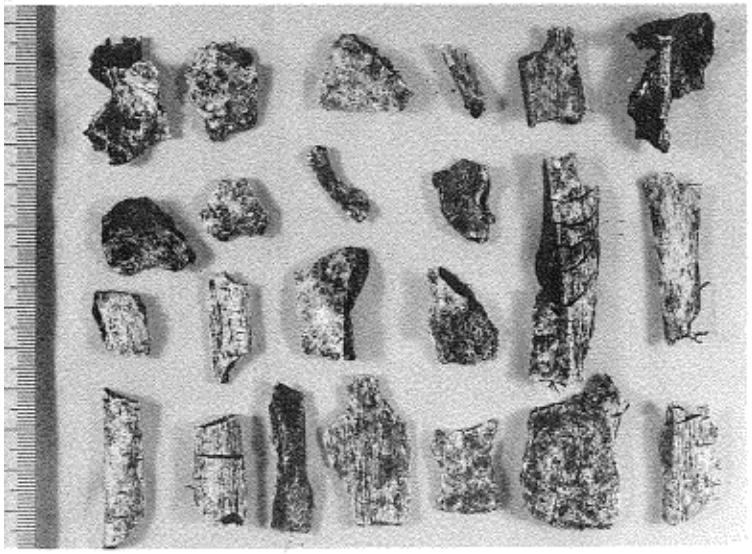


写真17
火　葬　骨

文 化 財 保 護 課

課長		千葉与一郎
課長補佐		木村三智夫
主幹		佐藤　栄
総務係	係長	加藤　忠雄
	主事	矢口セツ子
	〃	佐藤　博重
	補助員	山崎くみ子
管理係	主幹兼係長	扇　正人
	主事	佐藤　信子
	〃	渡辺　正憲
	補助員	鯨井千賀子
	〃	真壁由美子
調査第1係	技術主幹兼係長	後藤　勝彦
	技術主査	早坂　春一
	技師	白鳥　良一
	〃	佐々木安彦
	〃	丹羽　茂
	〃	高橋　守克
	〃	一條　孝夫
	嘱託	熊谷　幹男
	〃	清野俊太朗
	補助員	伊東　玲子
	〃	木村美紀子
調査第２係	技術主幹兼係長	斎藤　良治
	技術主査	高橋　多吉
	〃	佐々木茂楨
	技師	加藤　道男
	〃	佐藤　好一
	〃	斎藤　吉弘
	〃	真山　悟
	嘱託	中島　直
	〃	手塚　均
	〃	阿部　博志
築館町派遣	技術主査	平沢英二郎
	技師	後藤　彪
	〃	小井川和夫
	〃	阿部　恵
保護協会	書記	安藤マサ子
調査補助員		佐藤　房枝
		佐藤　哲雄
		門間　孝子
		門馬　敦子
業務補助員		阿部美恵子　今野　晃
		佐藤　美香　高橋　恵
		藤野　曜子　山内　耕
		佐藤　幸子　山崎　美幸
		松尾　敦子　庄司いく子
旧職員	総務係補助員	若部　洋子
		金野　幸子
		針生　好子